

秋の伝道礼拝第2回(10月20日)

わたしがあなたを選んだ

龍口 奈里子



イザヤ書 第46章3〜4節

ヨハネによる福音書 第15章16〜17節

今日の聖書の箇所は、第15章の冒頭から始まる「イエスはまことのぶどうの木」のたとえの終わりの部分です。このたとえば、16節の「あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るように」と、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるように」という主イエスの祈りの言葉をもって終わっています。15章の特に後半部分には、特徴的な言葉がいくつもちりばめられています。その一つ一つの言葉は深い響きを持って、私たちの心にすくと入り込んでいきます。

「わたしがあなたがたを愛した」
「友のために自分の命を捨てるこ

と」

「わたしはあなたがたを友と呼ぶ」「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。」

主イエスの死後作られた、主イエスが語った言葉集のようなものがあり、ヨハネはその断片的な主の言葉を今日のような物語の中に落とし込んで書いているような気がします。そして一つ一つの断片をつないでいくと、あるメッセージが浮かんできます。それは主イエスと弟子たち、主イエスと群衆とが、上下関係ではなく、主イエスが偉い教師のようでも、権威を持った人のようでもないということ。主イエスは弟子たちを「僕」ではなく「友」と呼びます。「わたしはあなたがたを友と呼ぶ」、そしてその友のためにわたしは命を捨てる、と言われるのです。そんな関係を築くためのルールはたった一つ。「たがいに愛し合いなさい」。これだけです。第15章最後に主の命令として記されている、このたった一つの決まり、それで十分だと言われます。更に

この一つ一つの主の言葉をひとつにまとめ上げているのが、本日の説教題とした主の言葉、「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ」なのです。

「神の選び」こそが旧約聖書から貫かれている聖書の根幹です。しかしどうして神様は私たちを選ばれたのでしょうか。あるいはどうやったら私たちは神に選ばれるのでしょうか。理由などありません。あえて言うならば、イスラエルの民が、どの民族よりも貧弱だったからだ、主なる神はイスラエルの民に言われました。だから選びの条件などないのです。なぜなら選ばれるのは神ご自身であって、私たちは全く受け身の存在だからです。そして選ばれた私たちは、16節の続きにあるように、「出かけて行って実を結び、その実が残るように」という命令に従うのです。

今、大学生は入学と同時に就職が気になり、早い人は1年生から

就職活動にやっきになります。インターンとして企業に入りその仕事があうかどうか働いてみたり、自分にふさわしい職業を選ぶためにカウンセリングを受けたりします。ただそんな必死の職業選択が、自分の思い描いた通り、計画通りにずっといく訳ではないということ。若いうちはあまりよく分かっていないような気がします。選んだその職業が、あなたの人生の最終目的ではないのだよと言ってあげたくなることもあります。もちろん、職業の選択や決断は、その人の人生を形作る大きな要素ではあるでしょう。しかし、その人の人生、これからの道には、時には何かに強いられて、自分の定めた目標からそれてしまったり、また心ならずも自分に抗うものによって別の道を歩みだすことがあるかもしれないのです。

「天職」とはドイツ語でベルーフ、元々の意味は神様からの呼び出しです。英語ではコーリング、それは神の呼びかけを聞いて、ことです。神の呼びかけを聞いて、それに応答する、それがその人の

働きとなり、職業となるのです。「天職」とは資格や適性にこだわって職業を選択することではありません。心ならずも神の呼びかけを聞く、そしてその声を受け止め、応える。そこに今の自分がある。それが「神の選び」です。

今日のキーワードは「選び」と「愛」です。主イエスは、「互いに愛し合うならば、その実が残る」と言っています。しかしどんなにがんばっても、私たちは自分を愛するように、他人を愛することなどできないのです。でもそんな私たちを、それでも神は愛してください。互いに愛し合いなさいと言われるのは、なぜなのでしょう。それは「わたしがあなたを選んだ」、この神の側からの、ただ一方的な、無条件の愛があるから、私たちはたとえ貧弱な存在であっても、罪を持った存在であっても、愛され、生きてゆくことができるのです。そして私自身もまた、その愛に生かされて、人を愛し

て生きる者となり実を結ぶことができる、と主イエスは言われます。

神学校を出て最初の赴任地で、

一人の高齢の婦人がおられました。礼拝だけでなく、ほとんどの集会にも参加されていました。あ

る時祈祷会でこの方の証しを聞く機会がありました。一人娘のお嬢

さんがミッションスクールの女子大に入学され、自然と教会に通う

ようになったそうです。ところが

お父さんが教会はだめだと強く反対され、お父さんの意見に従うよ

うにして、母親の彼女も教会に通うことに反対されたそうです。そ

してある時お嬢さんは自殺された

のでした。はつきりとした理由はわかりません。けれど、この方は

それからしばらくして教会の門をたたかれました。深い自責の念に

かられてからだだったのかもしれない。でもやがて今日の聖書の主

イエスの言葉に出会います。

「わたしがあなたを愛した」「わたしはあなたを友と呼ぶ」「その

のではない。わたしがあなたを選んだのだ。」

一つ一つの言葉が姉妹の心奥深く入り込んできたのでした。そし

て後悔しながら死んだように生きるのではなく、生き生きと「生きよう」と変えられたのでした。

主が彼女を選ばれたのは、多く反省したからではありません。真

面目に教会生活を送っていたからでもあります。ただ恵みとして

主が一方的に与えられた選びなのです。

この「神の選び」によって人生の大きな方向転換があったとき、

そこから豊かな実を結ぶ人生が整えられていくのでした。それは若

い時だけではありません。年を重ねていても、主は選んでくださる

のです。主の呼びかけに応えるのなら、「実を結ぶものはもつと豊

かに実を結ぶ。」「あなたがたはすでに清くなっている」から、と主

イエスは言われます(2〜4節)。

私たちはよい実を結ぶためには、一生懸命清くならなければならな

いと思ひ込んでいるかもしれない。もつと誠実に、もつと正しく、

でも主イエスは「わたしの語った言葉によって、すでに清くなっている」のだから大丈夫だと言われます。

教会という所はそういう所で

す。主イエスがぶどうの木として、私たちひとりひとりをその枝として結びつけてくださっています。た

とえ私たちがそのことを見失った

り、そこから離れてしまっても、

です。人間の側にだけ頼って、自分たちの力だけでは、その枝は折

れてしまい、実も実らないでしょう。しかし「わたしがあなたがた

を選んだ」というそのつながりの

中に置かれたならば、そこから豊かな実を結ぶ人生が始まります。

「わたしはまことのぶどうの木、あなたがたはその枝」

秋の実りの豊かさのように、教会の実りもたしかに実っているこ

とを信じて、互いに愛し合うこと

によって、主イエスにしっかりとつながっていることを覚えたいと思ひます。

(出席28名。文責・編集委員会。要約担当・島野三千代)